

主 題：禁欲よりも優先すべきこと

聖書箇所：コリント人への手紙第一 7章1-16節

6章で教えられていたことは、「自分のからだをもって、神の栄光を現わして行く」ことでした。それこそが私たち人間が造られた理由であり、尊い犠牲を払ってまで、イエスが私たちを救い出してくださった理由なのです。今、私たちがこうして生かされているのは、実はそのため＝神の栄光を現わす＝です。2000年前、イエスがこの地上を歩まれたように、私たち人間もそのように歩む必要があることを、パウロはこのIコリント6章で教えたのです。

それなのに、残念ながらコリント教会のクリスチャンたちのある者は、自分の快樂・欲望のために不品行を行ない、教会内ではそれが正しくさばかれていないという問題がありました。間違いなく、彼らは大きな問題の中にいました。そのような中でもまだ救いがあるのは、彼らの中のある者が「これではいけない！」と考へ、性的な罪に対して、それ以上に「結婚」ということに対して、クリスチャンとしてどのように考えるべきなのかということを実際にパウロに尋ねたことです。それが、7章の1節にある「さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、」ということばです。

今日、私たちはコリント教会の問題に対して、パウロが忠告した助言から「クリスチャンの結婚に対する優先順位」について皆さんといっしょに考えて行きたいと思ひます。それによつて、私たちが結婚に対して正しく理解し、まだ結婚していない人に対しては良きアドバイスをなすことができ、結婚している人に対しても、正しい夫婦関係を送つて行けるように願ひます。

### クリスチャンの結婚に関する優先順位について

#### I. 禁欲生活よりも神に喜ばれる生活

私たちがまず第一に優先すべきことは、「～してはいけない」「必ず～であるべきだ」というような表面的なもの（禁欲生活や律法主義）ではなくて、何よりも神のみこころに沿つた、また神に喜ばれる生活こそを優先すべきであるということです。

以前、私たちは当時のギリシャ文化に大きな影響を与えた「霊と肉の二元論」について学びました。それは、霊的なものは善でありかつ永遠に続くものであり、肉的なものは悪でありいずれは滅び行くものであるというものでした。その時、「霊肉の二元論」からは二つの態度が導き出されると話しました。①放縦主義、どうせ何をして私達のからだは汚れているのだから、より多くの罪を犯しても大して変わらない。②禁欲主義、自分の肉体と肉体的本能、そして欲望のすべてを悪と考へて、それらを完全に絶とうとする考へです。

パウロに質問をしてきた内容の背景には、その禁欲主義の教へがあつたようです。と言ふのは、1節の後半に「男が女に触れないのは良いことです。」とありますが、これは単に物理的な接触のことを言っているのではなく、「性的な交渉をもつ」ことを指しています。創世記20:6「神は夢の中で、彼に仰せられた。「そうだ。あなたが正しい心でこの事をしたのを、わたし自身よく知つていた。それでわたしも、あなたがわたしに罪を犯さないようにしたのだ。それゆゑ、わたしは、あなたが彼女に触れることを許さなかつたのだ。」」箴言6:29「隣の人の妻と姦通する者は、これと同じこと、その女に触れた者はだれでも罰を免れない。」にも見られる通りです。実は、先に話した禁欲主義の考へから、当時のコリント教会には、結婚するよりも結婚しない方がより信仰的（霊的、崇高）であるというような考へがあつたのです。

このような禁欲的な考へはいつの時代にもあります。たとえば、修道院などはキリスト教信仰をもつた人たちが共同生活をし、そこで禁欲的な生活をして、ますます神に喜ばれ霊的にも成長して行こうという考へ、また、聖職者（神に仕える者）は結婚するべきではないなど…。仏教でもそのような修行やより敬虔な者は結婚するべきではないというような教へがあります。

確かに、聖書全体を見ると「欲、欲望」は罪と同義ではないにしろ、「悪いもの」として表現されている場合が多いです。ヤコブ1:13-15「だれでも誘惑に会つたとき、神によつて誘惑された、と言つてはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。:14人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。:15欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。」、4:1-3「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。:2あなたがたは、ほしがつても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入ることができないと、争つたり、戦つたりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。:3願つても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。」。このような欲に対して私たちが完全に勝利できるなら、それはそ

れですばらしいことですが、それと同時に私たちが覚えるべきことは「欲＝罪」ではないということです。たとえば、食欲は生きて行くために必要なものです。欲を無くそうとするあまり、神が与えてくださっている恵みまでも拒んでしまっていて、消極的な信仰生活を送ってしまうことがあるのです。修道院での生活を考えて見ましょう。常に神を覚え、みことばを学び、同じクリスチャンたちと生活をともにするというのは良いことですし、また、異性との接触を断つことによって性的な罪を犯すことは少なくなるかもしれません。しかし、そのようにすることによって、例え罪を犯すことが少なくなったとしても、それよりもっと大切な、私たちに託された福音を語ることによって神の栄光を現わして行くことができません。

パウロはそのような禁欲的な教えに対して、「良いことです。」と言いながらも、2節で「しかし、不品行を避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」と、むしろ結婚することを勧めるのです。8-9節でも同じことが教えられています。「次に、結婚していない男とやもめの女に言いますが、私のようにしていただけるなら、それがよいのです。:9 しかし、もし自制することができなければ、結婚しなさい。情の燃えるよりは、結婚するほうがよいからです。」と。（但し、この2箇所のみことばは同じ内容ですが、その対象が「結婚していない男とやもめの女」に限定されているのは、特に結婚に関する願望が強かったからとも言えます）。ここに結婚した方が良いとする理由が、2節では「不品行を避けるため」、9節では「情の燃えるよりは」とあります。パウロはコリントの町に約1年半住んでいたために（使徒18:11「そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。」）、コリント教会の人たちがどのような環境にいるのかということを知っていました。不品行の罪で溢れていたコリントの町、そして、まだまだクリスチャンとしては幼い状態で、さまざまな誘惑や問題に対して弱いコリント教会のクリスチャンたちでした。そのような彼らだったので、パウロは結婚することを勧めたのです。

しかし、そのような欲に対して、誘惑に対して弱いのはコリント教会だけでしょうか？もし、私たちがどのような誘惑に対してもしっかりと正しい選択ができるようなら問題はないかもしれませんが、残念ながら、多くの場合、そうではありません。私たちの多くがある時、誘惑や欲をコントロールできなくて、罪を犯してしまいます。パウロが言うのはそういうことなのです。すべての人に対して、また特定の人たちに対して、禁欲の生活を強要するべきではないのです。同様に、結婚を強要するべきでもないのです。なぜなら、7節でパウロが教えるように、「私の願うところは、すべての人が私のものであることです。しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。」ということで、一人一人賜物や状況が違うのですから、何が最善かは簡単に判断できないのです。ある人の場合は、ここでパウロが教えるように、結婚ということを通して罪を犯す危険性が減り、またそれだけでなく、自分一人では知ることのできなかった恵みを知ることができるということもあるのです。

大切なのは6:20で教えられているように「自分のからだをもって、神の栄光を現わして」行くことです。私たちを救うためにご自分のいのちを捨ててくださったイエスのように、2000年前にイエスがなされたような歩みを私たちはなして行く必要があるのです。

少し話しがそれますが、パウロは結婚していたという説があることをご存じでしょうか？実は、多くの聖書学者は、彼がかつて妻帯者であったと推測します。というのは、彼がユダヤ教のラビ（教師）であり、サンヘドリンの議会の一人であったとするなら、それが最も自然だからです。当時のラビは結婚しないで子どもを持っていないと「子どもを殺した」とか「あるべき神の似姿を減少させた」と言われたのです。また、彼は聖徒（クリスチャン）たちが殺されるときに、「そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を授けられた私は、多くの聖徒たちを牢に入れ、彼らが殺されるときには、それに賛成の票を投じました。」（使徒26:10）という表現から、彼がサンヘドリンの議員であったと考えられます。当時のサンヘドリンの議員は必ず結婚していなければならなかったのです。その後、妻が亡くなったのか、それともパウロがクリスチャンとなったときに彼のもとを去って行ったのか、定かではありません。彼が信仰をもってすべてを失ったという表現は、もしかすると妻のことも含んでいると考えられることもできます。彼は「私の願うところは、すべての人が私のものであることです。」と言った後で、「しかし、ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。」と言い、自分自身が独身であることを神からの賜物として考えていたことが分かります。これは注目に値することです。なぜなら、当時のユダヤ社会においては、先に言ったとおり独身であることは非難されたり、信用を失うことであって、それを堂々と喜ぶような者はいなかったからです。ですから、私たちがしっかり覚えるべきことは、結婚していないことが何かの引け目（劣等感）になったり、神からの恵みが少ないかのように感じてしまったりはいけないということです。ここでパウロが「賜物」と言っていることばは、「無償の贈り物」「授かり物」という意味のことばで、それが教えるのは「結婚できない」のではなく「結婚しないことが最善である」ということです。

2節に「男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」とあります。みことばは一人の夫に対して一人の妻（一夫一婦制）こそがあるべき姿だと教えています。これに関しては前回学びました。夫婦に関する教えは次のポイントですから、3節以降を見て行きましょう。

## II. 自分の権利よりも相手に対する義務

ここでの基本は自分の権利・主張よりも相手に対する義務（思いやり）を優先しなさいということです。実は、2000年前のコリントでは夫婦間の関係においても、先ほどの禁欲主義の教えが入り込んでいて、一部の人たちは、たとえ夫婦間であっても性的な関係は持つべきではないと考える人たちがいたのです。それが3-5 a節のみことばの背景にあるのです。「夫は自分の妻に対して義務を果たし、同様に妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。:4 妻は自分のからだに関する権利を持ってはおらず、それは夫のものであります。同様に夫も自分のからだについての権利を持ってはおらず、それは妻のものであります。:5 互いの権利を奪い取ってははいけません。」しかし、結婚を制定された神はそのようなことを教えてはおられません。確かに、聖書を見ると結婚関係にない者どうしの性的関係は「不品行」であり、神の前に大きな罪であることは明白です。しかし、創世記にも見られるように、神は正しい結婚関係にある人たちに対して「神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」（創世記1：28）と命じられ、私たちが積極的に子どもをもつことを奨励しておられます。行き過ぎた禁欲主義はそのような正しい関係までも否定し、神が与えようとされる祝福を逃がしてしまうのです。

今、日本でも多くのカップルが離婚している中でよく見られることは、夫婦がお互いに自分の権利ばかりを主張している状況です。聖書が教える正しい夫婦のあり方は、お互いに自分の権利や都合を主張するのではなく、いかに相手に対して仕えて行くかということです。当時のコリント教会にも起こっていたのは、一部の人たちは禁欲を求めるあまり相手を無視していました。しかし、みことばは私たちが愛し合うことを教えています。その愛は単に相手を好きだという感情的なものではなく、相手のために喜んで犠牲を払って行くというものです。イエスがその模範です。自分の犠牲をもって愛を示してくださいました。相手を自分より優先して行くことが必要なのです。

唯一の例外としてパウロは5 b節に「祈りに専心するために、」ということ挙げていますが、それでも条件が三つあります。①お互いの「合意の上で」、②「しばらく」の期間限定で、③「また再びいっしょになる」という前提のものでなければならないのです。

聖書がはっきり教えることは、結婚とは二人が一体（一心同体）となること（創世記2：24「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」、エペソ5：31「それゆえ、人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる。」）であり、相手に仕えること（エペソ5：22-25「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。:23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。:24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。:25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。」）であるがゆえに、相手を優先するはずなのです。だから、パウロはここでもそのように（3-5 a節）教えているのです。

しかし、この「自分のことより相手のことを優先しなさい」という教えは、夫婦間にだけ限定されるものではありません。パウロはエペソ5：21で「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」と教えた後、その実践を様々な関係において具体的に教えています。夫婦間においても、親子間においても、社会における主従関係においても、仕えることを教えています。イエスもマタイ7：12で「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」と話し、相手を優先することが旧約聖書全体の教えであることを教えた後、有名な「狭い門からは入りなさい。…」（7：13）と続くのですが、最後にイエスがまとめとして語られた7：24「だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なう者はみな、」とは、それまでに語られた「従う者でありなさい」とか「さばいてはいけません」という教えはもちろん、山上の説教のすべてを指すのです。ですから、もし皆さんが家庭において、夫婦間において、相手を優先し、相手に仕えようとする者でないなら、その人は夫婦間だけでなく、この世にあっても神に従っていないということを知るべきです。というのは、自分の配偶者にさえ仕えて行こうとしない人が、どうしてその他の人に仕えて行くことができるのでしょうか？できません。そのような意味からも、家庭での態度は一つのバロメーターにもなります。それによってその人の信仰が本物かどうか吟味されるからです。皆さんは家庭において「仕える者」になっておられますか？それとも夫婦関係は「Give&Take」だと言って対等な関係を要求しておられませんか？

## III. 離婚よりも祝福を分け与える

三番目に、私たちクリスチャンは離婚などを考えるのではなく、祝福を分け与えることを優先するべきであるということです。これまで見てきたように、コリント教会の中で禁欲主義の影響を受けて、一

部の人たちは結婚を否定的に見る人たちがいました。彼らにとっての最善のあるべき状態は結婚していることではないから、その結婚を解消すべき（離婚）だというように考えるのですが、それに対してパウロは三つの状況を想定しています。①**クリスチャンどうし**（10-11節「次に、すでに結婚した人々に命じます。命じるのは、私ではなく主です。妻は夫と別れてはいけません。：11 ——もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい。——また夫は妻を離別してはいけません。」）②**クリスチャンと未信者の夫婦で未信者の方が一緒にいることを望む場合**（12-14節「次に、そのほかの人々に言いますが、これを言うのは主ではなく、私です。信者の男子に信者でない妻があり、その妻がいっしょにいることを承知している場合は、離婚してはいけません。：13 また、信者でない夫を持つ女は、夫がいっしょにいることを承知しているばあいは、離婚してはいけません。：14 なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。」）③**そうでない場合**（15-16節「しかし、もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。そのようなばあいには、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとしてあなたがたを召されたのです。：16 なぜなら、妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうしてわかりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうしてわかりますか。」）。パウロは③の未信者から去って行く場合以外の離婚は神のみこころではないと教えます。というのは、離婚は明らかにイエスが禁じておられたからです。（マタイ5：32「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれであっても、不貞以外の理由で妻を離別する者は、妻に姦淫を犯させるのです。また、だれでも、離別された女と結婚すれば、姦淫を犯すのです。」、マルコ10：2-12「すると、パリサイ人たちがみもとにやって来て、夫が妻を離別することは許されるかどうかと質問した。イエスをためそうとしたのである。：3 イエスは答えて言われた。「モーセはあなたがたに、何と命じていますか。」：4 彼らは言った。「モーセは、離婚状を書いて妻を離別することを許しました。」：5 イエスは言われた。「モーセは、あなたがたの心がかたくななので、この命令をあなたがたに書いたのです。：6 しかし、創造の初めから、神は、人を男と女に造られたのです。：7 それゆえ、人はその父と母を離れて、：8 ふたりの者が一心同体になるのです。それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。：9 こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」：10 家に戻った弟子たちが、この問題についてイエスに尋ねた。：11 そこで、イエスは彼らに言われた。「だれでも、妻を離別して別の女を妻にするなら、前の妻に対して姦淫を犯すのです。：12 妻も、夫を離別して別の男にとつぐなら、姦淫を犯しているのです。」と、不貞以外の理由での離婚禁止）。これは「命じるのは、私ではなく主です。」と言い、12節に「これを言うのは主ではなく、私です。」と言い、これ以降の命令に関してはイエスから直接聞いた教えではないことを明示するのですが、みことばである点で同じです。というのも、イエスが地上におられた当時は、クリスチャンと未信者との結婚関係というのは具体的な問題とはなっていなかったからです。

確かに私たちが願うのは、一つの家庭の皆が同じ信仰をもつことです。しかし、相手がクリスチャンでないからといって離婚し、無理やりに自分の家庭を変えてクリスチャンホームにはしはけないことです。神は何のために私たちを罪から救い出し、神の子と変えてくださったのでしょうか？神の栄光を現わすためです。何に対してでしょうか？自然界に対してでしょうか？動物界に対してでしょうか？そのような意味合いも全くないとは言えませんが、何よりも他の人に対してです。マタイ5：16「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と、まさしくそのために私たちは生かされているのです。それなら、離婚して自分が束縛から解放されて自由になることを願ったり、その方が神に喜ばれると思うのはおかしいことです。私たちは「地の塩、世界の光」です。このみことばから導き出される答えは、私たちは影響を受ける方ではなく与える方です。実際にそのようになっているとヤコブは14節で教えています。「なぜなら、信者でない夫は妻によって聖められており、また、信者でない妻も信者の夫によって聖められているからです。そうでなかったら、あなたがたの子どもは汚れているわけです。ところが、現に聖いのです。」と、クリスチャンは周りの人に影響を与えているのです。なぜなら、神が私たちを変え続けてくださり、神が私たちを成長させてくださり、神が私たちを用いてくださっているからです。

そもそも夫婦関係とは、先ほど見たように、相手の必要を考え、相手を愛し、相手に尽くして行くことです。そのように考えると、自分の勝手に離婚を求めること、また、そのようにして自分を守ろうとすることがいかに間違ったことであるかが分かります。だからといって、みことばがクリスチャンと未信者との結婚を勧めているわけではありません。それは次回学んで行くことですが、私たちが救われたときの状態のままで、神に喜ばれる選択をして行くことが必要なのです。大切なことは、私たちが神から与えられているこのからだを、今、与えられている恵みをもって、どのように神に喜ばれる選択をして行くかということなのです。

禁欲、つまり、欲に支配されるのではなく、欲をコントロールしようとするのは確かにすばらしいことですが、もしそれが、神が私たち一人一人に与えてくださっている賜物や、ご計画に沿わないもの

である場合、私たちはそれを止める必要があります。それが表面的な行いや律法的なものであるなら、私たちはもう一度初めの思いに戻る必要があります。どのようにすれば神が喜んでくださるのか、ということを考えることです。禁欲にしても初めはそのような思いから出てきたことかもしれませんが、それがいつの間にか罪を犯すことを恐れてしまって、私たちに託されている責任をないがしろにしてしまうことは残念です。

また、私たちは社会や様々な人間関係においてもそうですが、自分の権利ばかりを主張する者になりたくはありません。マタイ 20 : 25 - 28 でイエスは何と言われているでしょう？「**そこで、イエスは彼らと呼ばせ、言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。:26 あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。:27 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。:28 人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」**」。特に、教会の中や、それ以上に、夫婦の関係において、私たちは自分の権利を主張する以上に、相手にその必要を満たしているかどうかを問う必要があるのです。

最後に、私たちは影響を与える方です。皆さんはいかがでしょうか？夫婦の中であって、家族の中にあって、神から見て良い影響を及ぼしておられますか？皆さんが多くの人たちに福音を語り、神のきよさを身をもって伝え、人が救われるきっかけを作る者となっておられるでしょうか？